

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	希望の丘豊橋		
○保護者評価実施期間	2026年 2月 9日		～ 2026年 2月 27日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	15名	(回答者数) 15名
○従業者評価実施期間	2026年 2月 9日		～ 2026年 2月 27日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	12名	(回答者数) 12名
○事業者向け自己評価表作成日	令和 7年 3月 16日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	○環境 指導訓練室、屋外遊戯場ともに広く、自然が豊かでのびのびと過ごせる環境にある。活動に合わせてスペースを調整することで、思いきり動いたり落ち着いて取り組んだりすることができる。	・子ども達の目が届く場所で、お花や野菜を育てている。遊びの最中に自然と意識が向き、水をあげたり収穫したりと成長を感じられるようにしている。 ・室内外ともに、子どもたちが意欲に合わせて行動できるようにしている。それを可能にすべく、子ども達に危険が生じないよう適度な距離感で安全を確保したり職員配置を考えたりしている。	年々屋外遊戯場の地面が固くなってきている(砂が減ってきている)。晴れの日が続くと余計に砂遊びが難しくなるので、一度重機で掘り起こし土を柔らかくすることで、年齢問わず遊びが幅広く展開できるようにする。同時に、畑の拡張を行うことで今まで以上に身近で作物の世話ができるようにする。
2	○活動内容 子ども達の姿に合わせてリズム遊び、製作遊び、土粘土遊び、戸外遊び、散歩、食育、買い物、こども園や児童クラブとの交流など、様々な活動を設定し行っている。	・活動が固定化しないよう、その時々の子どもの興味や発達、季節の遊びなどを考えてプログラムを設定している。 ・集団活動が苦手なお子さんに関しては、活動への参加は基本的に自由にしつつ、経験の機会が少なくならない様、個々に合わせたタイミング、環境づくり、工夫をしながら誘っている。	希望の丘だからこそできる支援(小集団の良さ)は職員の意識の中に保ちつつ、子どものその時々の様子に合わせて関わり方(小集団、個別)を柔軟に変更していく。 発達には子どもの能動的な取り組みが不可欠なので、意欲を引き出すようないいチャレンジを、活動の中に組み込んでいく。
3	○人員配置 主に保育士資格を有する常勤職員を多く配置し、療育にあたっている。研修を積極的に受けられるようバックアップ体制を取り、職員それぞれがスキルアップを目指している。	・たくさんの視点で子どもたち一人ひとりを見ることで、困り感や成長を見逃さず、子どもの行動の理解やそれに伴う支援方法の充実へとつなげている。 ・職員がそれぞれの興味に合わせて積極的に研修を受けることで、子どもの支援の質向上につなげている。	受講した研修内容をなかなか活かすことができていない職員もいるので、職員間で受講内容を共有した後、どのような方法や場面で子ども達に還元できそうかを話し合う。また、受講した内容を正確に他の職員にも伝えることで、受講した職員だけでなく職員全体の質向上にもつなげていく。
4	○保護者対応 送迎の際のコミュニケーションや個別に時間をかけて丁寧に行うモニタリング、『つむぎの会』などで、悩みや困りごとが共有できる機会を作っている。	・普段からコミュニケーションを多くとっていき関係性を作り、安心して思いが出せるようにしている。自分から積極的に発信されない保護者もみえるので、表情などを見て職員側から声を掛けたり、少人数で話せる『つむぎの会』に誘ったりしている。 ・対応や返答に困った場合は持ち帰って職員間で話し合いを行い、後日お返事をするようにしている。	保護者によって、また話したい内容によって、シチュエーションの設定を考え対応する。傾聴するという姿勢を職員は持ち、相談事は解決することを1番の目的にするのではなく、お話をしっかり聞きいて一緒に考えてい姿勢を大切にしている。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	○保育士や教員以外の有資格者がいないことで、専門的な支援が提供できていないと思われやすい。	・相談時にお話したことや支援方法などが有資格取得の方が伝えることと一緒に話しても、保育士というだけで専門性が伝わりにくかったり保護者の方に入りにくかったりする場合がある。	・知識だけを伝えるのではなく、子どものどの様子からそう考察されるのか、実際に関わってみてどう変わったのかなど、保護者の方に実感を持ってもらえる方法で伝えることで理解を得られるようにする。
2	○地域住民を招待する形で地域連携が持っていない。	・利用児や保護者向けのイベント開催に精一杯で、地域の方を呼ぶようなイベント等の開催は計画も実行もできていない。 ・他の事業所が行っているイベント等に参加をしたことがなく、どのような形ならいいのかのイメージが湧かない。	・まずは法人の関連施設を招待するなど、ハードルを下げた開催の方法を考えていく。 ・他施設にアドバイスをもらう。 ・機会を見つけて他事業所のイベントに参加させていただく。
3	○職員が多いことにより各事柄に対しての周知徹底に様々な工夫が必要。	・常勤職員は情報共有がしやすいが、非常勤職員は勤務日数や時間の関係で周知徹底が難しい。情報共有だけでなく子どもの理解に関する、支援する時間が短いことでなかなか把握がしづらい部分がある。 ・ノートやミーティングを活用しているが、発信する側も受診する側も職員一人ひとりが意識して情報を獲得していけないと伝達漏れが起こりやすくなる。	・書類等の閲覧に限らず、ミーティングの内容などにも職員名簿のチェックを用いることで、誰に伝わったのか、伝えなければならないのかを目で見て分かるようにする。 ・個人情報には留意しつつ、全職員がメンバーとなっているSNSで情報共有を行う。